安倍晋三真珠湾講演の批判的談話分析

王　　偉

要旨

2016年12月27日、当時の日本国首相・安倍晋三がアメリカにある真珠湾戦争慰霊碑に向かって『和解の力』と題した演説を行った。この講演に対し、アメリカをはじめとする世界各国のマスメディアは安倍の演説には謝罪の意が全く込められていないと批判し、講演を「日本式散文詩」と酷評した。そこで、筆者は批判的談話分析理論、主に P.Chilton のディスコース空間構築理論を用いて、日本語言語学の理論を併用して真珠湾演説というディスコースの産出メカニズム及びそこに内蔵された政治意図を分析する。真珠湾演説は日本式散文詩ではなく、巧妙に構築された政治的談義であると結論づけたい。

【キーワード：真珠湾講演 / 批判的談話分析 / 空間構築理論 / 政治的談義】

1. はじめに

1.1 研究背景

2016年12月27日に、安倍晋三がアメリカの真珠湾で『和解の力』[1]というテーマで演説した。この演説をめぐって各国のマスメディアは異なる意見を出した。日本側、例えば『産経新聞』は「国際戦略上においていくつもの意味がある。強固で盤石な同盟関係を築き上げた日米の姿を強く国際社会に発信することで、...」[2]と解説した。つまり、『産経新聞』は安倍が謝罪の目的で真珠湾を訪問したのではないと名言したのである。一方、他の国のマスメディアは全く違った皮肉めいた言葉で真珠湾講演を強く批判した。例えば、中国の環球時報[3]は以下のように真珠湾講演についてコメントした：

つまり、戦争がアメリカ側にもたらした被害には一切触れず、両国に勇敢に戦ったことを褒めただけだ。誰が戦争を起こしたことも言及しようともせず、まるでこの戦争はアメリカと異星人との間に起こったことだったような口調だ。そして、米国の寛容さに対して絶えず感謝の意を讃え、アメリカは今後も世界のリーダーとして、日本も同盟国として支持していくとの意味がはっきりと読み取ることができる。よって、対戦したアメリカすら日本を許したので、他の国は日本を許さない訳にはいかないような談義である。（王偉訳）

---

[1] 真珠湾講演日本語全文は https://www.nikkei.com/article/DGXLASFS27H41_X21C16A2905E00にある。なお、本論文での番号や下線はすべて王偉が付けた。

[2] www.sankei.com/politics/amp/161206/plt1612060003-a

[3] 環球時報 wechat 購読誌2016年12月28日により

環球時報は以上のように講演の主旨を分析した。真珠湾講演から見た安倍政権の主張を、兵士の勇敢さを讃えること、米国の寛容を求めること、日本を許すことという三点にまとめた。つまり、誰が戦争を挑発したのか、戦争の責任はどちらにあるのかという根本的なところには一切触れずに、和解と許しだけを一方的に求めるということに違和感を感じたのである。言い換えれば、戦争－平和、戦争加害者－戦争被害者という二項対立の構図がこの日本式散文詩のようなディスコースによって解消されたと言える。

しかし、講演のテキストを精読すると、安倍首相というより日本政府の太平洋戦争に対する歴史観及び政治的理念がその背後にあることが窺える。安倍政権の政治理念及び太平洋戦争に対する歴史観がこの演説を主導したのではないかと思われる。従って、真珠湾講演は人為的な日本式散文ではなく、巧妙な政治的談義に仕上げられたと判断できる。

1.2 先行研究および本論文の出発点

本論文は批判的談話分析理論を用いて真珠湾講演という政治ディスコースを分析対象にしたものである。中国の学界では、批判的談話分析理論を用いて政治ディスコースを分析する研究は2010年から盛んになってきた。特に北京オリンピック以降、中国政府が大国から強国へ転換すると掲げてから、超大国であるアメリカは中国が唯一超えたい存在となった。[4]従って、ブッシュ、オバマやトランプなどの演説を批判的談話分析理論を用いて分析する論文や著書は絶えず刊行されるようになった。一方、日本の政治ディスコースに対する研究、とりわけ批判的談話分析理論を用いての日本の政治ディスコースの研究は比較的少ないが、ここ５年くらいから注目されるようになってきた。[5]数少ない日本の政治ディスコースの研究の中で、安倍首相の講演を分析対象にした研究はその大半を占めている。第二次世界大戦に関する講演は真珠湾講演のほか、第二次世界大戦終戦70周年講演、原爆75周年記念講演、アメリカ国会講演などがある。

一連の研究の中、政治戦略などの角度から安倍晋三の講演を研究する文章、例えば、安倍晋三の国会演説を対象にした論文がある。楊（2017）がCDA及び歴史分析法を併用して安倍政権の朝鮮政策を、テキストの内容とテーマ、言語学の表現などの細部まで分析した。安倍政権はルートリックや政治ディスコースの技巧を使って最終的に「やればできる」という政治イメージを作り上げることに努めたと論じた。また、日本『日本内閣総理大臣安倍晋三施政方針演説の批判的メタファー分析』において、李（2016）は、「旅、戦争、自然、擬人、建物、勉強、演劇、碁、旗」という9種類のメタファーの使用を使用することによって、安倍政権が2012年から2016年までの施政方針演説を詳細に論述した。9種類のメタファーを使用することで安倍政権の政治主張を強くアピールし、施政理念をわかりやすく伝える効果があるとも言及した。そして、メタファーが頻繁に使われる原因について、国際社会と日本国内の現状に立脚し、安倍個人の政治的意図、および日本人としての伝

[4] 2010年、中国のGDPが日本を超えてアメリカについて世界第二位となった。

[5] その理由は中国の日本語研究者の育成背景や人員構成にあると考える。日本語専門の研究者は英語専門に属する言語学のCDA理論に精通する人が少ない。

統的意識を視野に入れるべきだと提言している。(李 ,1) 李の研究はメタファーという斬新な視点でなされたものであり、本論に大きなヒントを与えた存在である。

上記、第二次世界大戦に関する四つの講演の中、真珠湾講演はオバマ政権時に於ける最後に行われた外交イベントの時に公表された政治的文章であり、他の三つの講演とスタイルが明らかに異なっており、また「日本式散文詩」と呼ばれている通り、異様なディスコースである。この異様なディスコースはどのような目的で、どのように構築されるか、ディスコースを精読して分析する必要がある。また、ほかの三つの講演と異なって、中国最大の学術データベース CIKI[6] で調べた限り、談話分析理論を用いて真珠湾演説を分析対象にした論文はないということがわかった。本研究はこの空白を埋めることに努める。

1.3 Chilton の空間構築理論

批判的談話分析は理論であり、方法でもある。談話はディスコースとも呼ばれ、口頭と文章に分かれる。批判的談話分析理論は談話の言語学上の特徴をそのディスコースの置かれた社会・歴史・文化環境と関連付けて分析し、言語構造の表象の特徴を通してその背後に内蔵されたイデオロギーを探る理論である。最終的に言語と社会や権力やイデオロギーの多重的な関係を解くのが目的である。故に、政治テキストは批判的談話分析理論の最も重要な研究対象になっている。代表者には Norman Fairclough、Ruth Wodak、Teun A.van Dijk、Paul Chilton などがいる。

本論文では Chilton の空間構築理論を採り入れる。理由は以下の通りである。先ず Fairclough らと異なり、Chilton は認知言語学の理論を融合させて、「隠喩」や「言語のろ過装置」や「政治ディスコースの説教機能」などの説を唱え、ドイツやフランスやロシアの政治家の政治ディスコースを分析し、ティスコースの構築がどのように政治実践を影響するのかにおいて批判的談話分析理論に大きく貢献した。Chilton の空間構築理論はその集大成と言っても過言ではない。

また、Chilton によると、政治ディスコースを分析する際、政治ディスコースの世界を把握すべきである。時間・空間・価値観という三つのディメンションからなる政治ディスコースの構成モデルは政治ディスコースにける言語活動を理解する礎なのである。彼はディスコース空間構築理論を以下の図のように説明した。

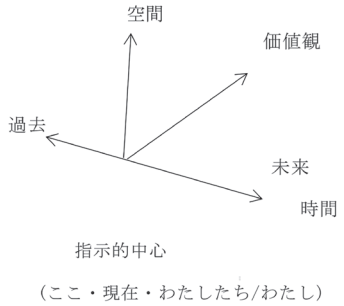

図1.Chilton（1997）ディスコース空間構築理論（日本語は王偉作成）

[6] 中国知網：www.cnki.net

話者が発話すること、自分自身の立ち位置を指示的中心（deictic center）として、自分自身以外の存在を時間軸（time）、空間軸（space）とモダリティー / 価値観軸（modality）で表記する。それによって、話者の目指したディスコースの世界が意図的に構築される。この構築のおいての要は「中心」ー話者と「周辺」ー話者以外の距離である。なお、この距離は絶対的ものでなく、時間、空間とモダリティー / 価値観という三つのディメンションの交互で形成されるものである。ディスコース空間構築理論は講演のようないわゆる正式な口頭ディスコースを分析するのに最適な理論だと思われる。

2. 分析

2.1 人称代名詞・人称名詞から見た空間と価値観

以下、真珠湾演説のテキストを用いて名詞、代名詞をデータ化して分析する。

表１．真珠湾講演における人称名詞・人称代名詞の統計

品詞分類	中心	周辺	共同
人称代名詞	わたし（２０回）	なし	わたしたち（９回）
人称名詞	日本国総理大臣（３回） 日本国民（２回） 日本と子供たち 日本人 日本帝国海軍士官飯田房太中佐 日本帝国海軍大尉	オバマ大統領（７回）、ハリス司令官、ご列席の皆さま、アメリカ国民の皆さま、アメリカの子供たち、アンブローズ・ビアス、みなさん	子供たち、兵士たち、愛する人、生まれた子、母、父、民、世界の人々、孫たち、祖父

先ず人称代名詞の使用状況を見ると、中心指示にある「わたし」が20回も使用されており、それに対して「周辺」を表記する「あなた」は一回も出ていないことが分かった。一方、共通領域にある「わたしたち」が合計で9回も出た。

日本語の場合、代名詞の「わたし」は個人の意見や主張を表明するときに使用されるが、実際の運用場面では「わたし」が省略されるケースが多い。真珠湾講演の場合、情報発信者が安倍晋三であると明白であるものの、「わたし」を多用するのは注目に値する。普通ならば、このは2540字のディスコースの中「わたし」を20回も使用することはない。その理由については以下の文を例にして分析しよう。

(1) オバマ大統領、ハリス司令官、ご列席の皆さま、そして、すべての、アメリカ国民の皆さま。パールハーバー、真珠湾に、いま<u>わたし</u>[7]は、<u>日本国総理大臣</u>として立っています。

(2) <u>わたし</u>は<u>日本国総理大臣</u>として、この地で命を落とした人々の御霊に、ここから始まった戦いが奪った、すべての勇者たちの命に、戦争の犠牲となった、数知れぬ、無辜の民の魂に、永劫の、哀悼の誠を捧げます。

演説の初頭から途中まで、二回も「わたし」と言ったほかに「日本国総理大臣」を付け加えた。発

[7] 例文の下線は著者による追加、以下同様。

言の立場は安倍晋三という一日本人としてではなく、安倍晋三という日本国総理大臣の政治的な立場であることを最初から表明することによって、真珠湾講演は日本政府の戦争観の表明と窺えるだろう。故に、真珠湾講演は政治ディスコースに過ぎないことは明白である。

一方、周辺の人称名詞がゼロの代わりに、「オバマ大統領」を7回の使用することから、安倍が聞き手を強く意識して発言したのも読み取れる。断続的に人の名前などを言及し、自分の発話に注目させる効果を果たし、「わたし」―隠された「あなた」という会話の姿勢が巧妙に築き上げられた。それによって、講演を一方的に政治主張をアピールするディスコースを両国の代表者が平等に会話するディスコースへと仕上げたのである。

また、「国民」、「人々」、「民」などを多用して、真珠湾講演という政治ディスコースによって伝達された情報や主張を大多数の人に訴えようとするディスコースの意図が達成できたと思われる。安倍の政治主張が真珠湾演説の随所に内蔵されているといってもよい。

2.2 文構成から見た時間と価値観

GAP（2013）は、一般的に、人の注目は現在に集中しやすく、過去と未来は現在という時間軸の両端にあると論じた。つまり、過去から流れてくると現在になり、現在から流れていくと未来になる。よって、ディスコースにおける時間の流れあるいは移行はディスコースの焦点を変える機能がある。以下、真珠湾講演の全文の時間と価値観の関係性を考察しよう。

オバマ大統領 ... 兵士たちの声が聞こえてきます。（**現在1**）[8]

↓

あの日 .. すべての思いが断たれてしまった。（**過去1**）

↓

その厳粛な事実を噛みしめるとき ... 不戦の誓いを貫いてまいりました。（**現在2**）

↓

戦後70年間に及ぶ平和国家としての歩みに、... 表明いたします。（**未来1**）

↓

昨日、... 母たちの胸に深く刻まれています。（**過去2**）

↓

わたしたちも、覚えています。...「希望の同盟」です。（**未来2**）

↓

わたしたちを結びつけたものは、... ありがとうございました。（**現在3**）

以上の図から、真珠湾講演というディスコースにおける時間の移行が時計回りの規則を守らずに自由に変わることがわかる。だが、現在 - 過去 - 未来という講演ディスコースの典型的な構成は守

[8]「（現在）」は著者による追加、以下同様。

られている。特に、過去に関連する歴史の回顧は三度も挿入されていることに注目すべきである。

①散文詩のような戦争当日の回顧録。(**過去1**)
②飯田房太中佐の物語。(**過去2**)
③リンカーン・メモリアルの壁に刻まれるエイブラハム・リンカーンの名言。(**過去2**)

それぞれの「過去」に阿倍政権の政治意図が隠されている。①は散文詩のような描写で戦争の残酷さを覆い、戦争の被害を詩的に表現することによって、戦争に対する罪悪感を和らげることができた。②は残酷な戦時中であっても寛容の心があるという演説の趣旨とつながる。③は平和の大事さを訴えるという演説者の意図を体現する。

受信者が過去の歴史—真珠湾攻撃に関する謝罪がなくても歴史への回顧を期待しているはずであるが、散文詩のような戦争回想にしかない上、飯田房太中佐の物語とエイブラハム・リンカーンの名言が織り交ぜて、受信者本来期待された過去を覆った。

また、ディスコースの初めから現在という視点に立ち、途中で数回も過去、現在、未来に視点を転換したが、ディスコースの最後は現在に帰結した。これはいわゆる現在重視志向であり、政治現世主義の現れのようなものである。過去を軽く触れ、現在に立って未来の日米関係の友好を前に全面的に出すという政治意図である。真珠湾講演の時間構成から安倍政権の価値観は少なからず窺えるのではなかろうか。

2.3 語彙と価値観

2.3.1 形容詞と価値観

日本語言語学の理論によると、一般的に、言葉事態に感情がないが、言葉の組み合わせや主語との連動によって、抽象的な言葉が話者の具現化された価値観を表すことができる。(森山 ,42) とりわけ、形容詞の使用が価値観の体現に適していると思われる。

日本語の形容詞に「い形容詞」と「な形容詞」に分かれているが、基本機能は同じである。また、機能によって、「うれしい」、「懐かしい」など情意を表す形容詞と「大きい」、「白い」など情態を表す形容詞に分けることができる。それぞれ二種類の形容詞ではあるが、政治ディスコースにおいては同じ役割を果たすこともある。真珠湾講演の形容詞を統計表にしてみると、以下のようになる。

表2.　真珠湾講演における形容動詞使用状況の統計

分類	例
情態	柔らかな、青い、静か、白い、明るい、美しい
情意	崇高、寛容、必要、共通、固く

以上の表から見ると、情態形容詞には「青い」、「静か」、「白い」、「明るい」があり、すべてが平穏、明るい感覚を表すような形容詞である。特に、「静か」という言葉が3回も出た。

(3) 耳を澄ますと、寄せては返す、波の音が聞こえてきます。降り注ぐ陽の、やわらかな光に照らされた、青い、静かな入江。

(4) 戦後70年間に及ぶ平和国家としての歩みに、わたしたち日本人は、静かな誇りを感じながら、この不動の方針を、これからも貫いてまいります。

(5) わたしたちを見守ってくれている入り江は、どこまでも静かです。

「静か」は物音がしないという意味以外に、心理的な動きや気持ちが落ち着くことをも意味する。[9] 例えば、「静かに余生を送る。」のような例文がある。戦争という物騒な存在に対し、今は静かな入り江のように穏やかな平和の時代を維持することが大事である、これは安倍が講演を通して受信者に伝えたい政治意図の一つであろう。

2.3.2 名詞と価値観

一方、感情を表さない名詞もこの政治ディスコースにおける安倍政権の講演の意図を映し出せると思う。

表3. 真珠湾講演における名詞使用状況の統計

具体イメージ	波の声、陽光、光、入り江、耳、会話、心、風、波、声、海、花、碑、勇者、胸、壁、歴史、真珠
抽象イメージ	沈黙、未来、夢、思い、御霊、命、魂、誇り、決意、敬意、誓い、未来、道、慈悲、任務、寛容、誠、哀悼、平和、繁盛、幸せ、感謝、和解、友情、信頼、同盟国、力、象徴、記憶、努力

戦争と直接関連する「爆撃」「紅蓮の炎」「戦禍」「戦死」「焼け野原」「犠牲」「戦争」「戦闘」「敵」「悪意」「憎悪」などのマイナスのイメージを帯びる言葉が少ないのに反し、図6にあるプラスイメージの言葉が圧倒的に多いことがわかる。

(6) 耳を澄まして心を研ぎ澄ますと、風と、波の音とともに、兵士たちの声が聞こえてきます。自分の未来を、そして夢を語り合う、若い兵士たちの声。最後の瞬間、愛する人の名を叫ぶ声。生まれてくる子の、幸せを祈る声。

(7) わたしたちを見守ってくれている入り江は、どこまでも静かです。パールハーバー。真珠の輝きに満ちた、この美しい入り江こそ、寛容と、そして和解の象徴である。

真珠湾講演全文で、和解が6回、寛容は7回も出ている。戦争に関連する言葉の使用を意図的に減らすと同時に、和解、寛容のような言葉を頻繁に使用する理由は安倍政権の真珠湾攻撃の歴史に対する態度いわゆる歴史観にある。安倍政権の立場では、人道的に死者を追悼するが、大事なのは未来に目を向け、日米の関係を友好の方向に誘導することであろう。

その他に死亡を「紅蓮の炎の中」、「眠っている」、「眠る」、「戦死」という言葉に変えることは、日

[9] 明鏡国語辞典による

本の神道教における死に対する超然的な思想と連想させるのである。神道教の思想では、死んだ人は神になれる。肉身の滅びは一時的なものであり、精神的な超越すなわち成仏のようなことが大事にされている。真珠湾講演のディスコースでは、戦争による死亡のような残酷な物語をヒロイズムの物語に書きかえられ、戦争の責任が誰にあるかという最も重大な歴史問題を言及しようとはしなかった。真珠湾講演は一見日本式散文詩のようであるが、実は政治的談義に過ぎない。

3. まとめ

本論文は安倍晋三による『和解の力』と題した真珠湾講演を取り上げ、批判的談話分析理論、主にP.Chiltonのディスコース空間構築理論を用いてディスコースの産出メカニズムと、そこに内蔵された政治意図を分析した。具体的には、真珠湾講演のテキストに使われた言葉を例にまとめて分析した。

2.1では人称代名詞、人称名詞を「中心」「周辺」「共同」という三つの空間構築理論の概念を用いて論じた。人称代名詞「わたし」を複数回にわたって使用して話者である安倍首相の自己主張を表明することと深く関連していると分析した。一方、周辺に位置する「オバマ大統領」を7回も使用することによって日本－アメリカという偽りの会話の構図を構築した。また、共同領域にある人称代名詞「わたしたち」「人々」「国民」を意図的に使用し、ディスコースの輻射範囲をアメリカを超越させ、全世界に及ばせる意図があると結論付けた。

2.2では真珠湾講演における時間と価値観の関連性の分析である。真珠湾講演のディスコースは過去→現在→未来という自然な時間移行と逆に、現在→過去→現在→未来→過去→未来→現在という循環に再構成された。現在から始まり、現在に帰結した。過去は挿入されるが、詩的な描写や和解という主旨を表す飯田房太中佐の物語とエイブラハム・リンカーンの名言の言及にとどめている。その中で、日米が世代に渡る友好への政治意図が未来の構図に隠されている。真珠湾講演ではディスコースの時間は巧妙に再アレンジされて、安倍政権の戦争観を巧妙に表現された。

2.3では形容詞と名詞の二側面から、マイナスとプラスイメージの二種類からテキストを分析し、すべてが「和解」というディスコースの主旨に合致したと分析した。

4. 結論と今後の課題

真珠湾講演は2016年12月のことであり、当時米国大統領のオバマ氏の在任中に於ける両国の最後の外交行事であった。後任者がトランプ氏になった中、アメリカの次期政府に日米関係の基調を平和共存としたいという安倍政権の政治意図が読み取れる。このような意味でも、真珠湾講演は結局政治的談義にならざるを得ないのである。

真珠湾講演の前の2016年5月28日に、当時アメリカ大統領のオバマ氏が広島にある原爆ドーム記念館を訪問し、そこで講演した。真珠湾講演と広島講演という二つの政治ディスコースの間テクスト性を分析することも視野に入れるとより意味深い論文になる可能性もあると感じている。また、現在新型コロナによって国際移動が容易にできなくなったので、太平洋戦争関連の日本の史料を調

べようもないのは遺憾極まりないことである。今後は上記二点から研究を発展させていきたいと考えている。

参考文献

Cap,P. Towards the Proximization Model of the Analysis of Legitimatize in Political Discourse. *Pragmatics*, 2008. 40(1) 17-41.

Chilton,P. 2004. *Analysing Political Discourse:* Theory and Practice. London: Routledge.

小泉保 .1993. 日本語教師のための言語学入門［M］. 東京 : 大修館書店.

大嶽秀夫編 .1991.《講和問題についての平和問題談話会声明》［J］.《戦後日本防衛問題問題資料集》. 第一巻 . 東京：三一書房 .

大堀壽夫.　2002.　認知言語学［M］.　東京 : 東京大学出版会.

孫吉勝 . 2013，跨学科視域下的国際政治言語学 : 方向与議程［J］，外交評論 (1) : 12-29。

唐韧 .2014，批評話語分析之認知語言学途径 : 以英国媒体移民話語為例［J］，外語研究 (6) : 18-22。

翟東娜 . 2006. 日本語言語学［M］. 北京 : 高等教育出版社。

中曾根康弘 .1992. 政治と人生　中曾根康弘回顧録［M］. 東京 : 講談社.

水谷修、他編 . 2005. 新版日本語教育事典［Z］. 東京 : 大修館書店.

籾山洋介 . 2009.　日本語表現で学ぶ 入門からの認知言語学［M］.　東京 : 研究社

森山達郎 .2015.　ここからはじまる日本語文法［M］. 東京 : ひつじ書房.

羅納德 ·W 蘭艾克 . 2016. 認知文法導論［M］. 黄蓓訳。北京 : 商務印書館。

李童 . 日本内閣総理大臣安倍晋三施政方針 演説の批判的メタファー分析（2013~2016）［D］.2016年5月 .

盧婷婷 . 2018. 政治言語学 : 理論と方法 .［M］上海 : 上海人民出版社。

楊漪漪 .2017. 安倍施政演講中有关朝鮮主題政治話語的文本分析［J］. 東北亜研究（2）：31-35。

約翰・約瑟夫 . 2017. 語言与政治 . 北京：外語教学与研究出版社。

（王　偉、東北大学国際文化研究科言語応用論講座、修了生）

付録：真珠湾講演日本語全文

オバマ大統領、ハリス司令官、ご列席の皆さま、そして、すべての、アメリカ国民の皆さま。パールハーバー、真珠湾に、いまわたしは、日本国総理大臣として立っています。

耳を澄ますと、寄せては返す、波の音が聞こえてきます。降り注ぐ陽の、やわらかな光に照らされた、青い、静かな入江。

わたしのうしろ、海の上の、白い、アリゾナ・メモリアル。

あの、慰霊の場を、オバマ大統領とともに訪れました。

そこは、わたしに、沈黙をうながす場所でした。

亡くなった、軍人たちの名が、しるされています。

祖国を守る崇高な任務のため、カリフォルニア、ミシガン、ニューヨーク、テキサス、さまざまな地から来て、乗り組んでいた兵士たちが、あの日、爆撃が戦艦アリゾナを二つに切り裂いたとき、紅蓮の炎の中で、死んでいった。

75年が経ったいまも、海底に横たわるアリゾナには、数知れぬ兵士たちが眠っています。

耳を澄まして心を研ぎ澄ますと、風と、波の音とともに、兵士たちの声が聞こえてきます。

あの日、日曜の朝の、明るく寛いだ、弾む会話の声。

自分の未来を、そして夢を語り合う、若い兵士たちの声。

最後の瞬間、愛する人の名を叫ぶ声。

生まれてくる子の、幸せを祈る声。

一人、ひとりの兵士に、その身を案じる母がいて、父がいた。愛する妻や、恋人がいた。成長を楽しみにしている、子どもたちがいたでしょう。

それら、すべての思いが断たれてしまった。

その厳粛な事実を噛みしめるとき、わたしは、言葉を失います。

その御霊よ、安らかなれ－－。思いを込め、わたしは日本国民を代表して、兵士たちが眠る海に、花を投じました。

オバマ大統領、アメリカ国民の皆さん、世界の、さまざまな国の皆さま。

わたしは日本国総理大臣として、この地で命を落とした人々の御霊に、ここから始まった戦いが奪った、すべての勇者たちの命に、戦争の犠牲となった、数知れぬ、無辜の民の魂に、永劫の、哀悼の誠を捧げます。

戦争の惨禍は、二度と、繰り返してはならない。

わたしたちは、そう誓いました。そして戦後、自由で民主的な国を創り上げ、法の支配を重んじ、ひたすら、不戦の誓いを貫いてまいりました。

戦後70年間に及ぶ平和国家としての歩みに、わたしたち日本人は、静かな誇りを感じながら、この不動の方針を、これからも貫いてまいります。

この場で、戦艦アリゾナに眠る兵士たちに、アメリカ国民の皆さまに、世界の人々に、固い、その決意を、日本国総理大臣として、表明いたします。

昨日、わたしは、カネオへの海兵隊基地に、一人の、日本帝国海軍士官の碑を訪れました。

その人物とは、真珠湾攻撃中に被弾し、母艦に帰るのをあきらめ、引き返し、戦死した、戦闘機パイロット、飯田房太中佐です。

彼の墜落地点に碑を建てたのは、日本人ではありません。攻撃を受けた側にいた、米軍の人々です。死者の、勇気を称え、石碑を建ててくれた。

碑には、祖国のため命を捧げた軍人への敬意を込め、「日本帝国海軍大尉」と、当時の階級を刻んであります。

The brave respect the brave.

「勇者は、勇者を敬う」

アンブローズ・ビアスの、詩は言います。

戦い合った敵であっても、敬意を表する。憎しみ合った敵であっても、理解しようとする。

そこにあるのは、アメリカ国民の、寛容の心です。

戦争が終わり、日本が、見渡す限りの焼け野原、貧しさのどん底の中で苦しんでいた時、食べるもの、着るものを惜しみなく送ってくれたのは、米国であり、アメリカ国民でありました。

皆さんが送ってくれたセーターで、ミルクで、日本人は、未来へと、命をつなぐことができました。

そして米国は、日本が、戦後再び、国際社会へと復帰する道を開いてくれた。米国のリーダーシップの下、自由世界の一員として、わたしたちは、平和と繁栄を享受することができました。

敵として熾烈に戦った、わたしたち日本人に差しのべられた、こうした皆さんの善意と支援の手、その大いなる寛容の心は、祖父たち、母たちの胸に深く刻まれています。

わたしたちも、覚えています。子や、孫たちも語り継ぎ、決して忘れることはないでしょう。

オバマ大統領とともに訪れた、ワシントンのリンカーン・メモリアル。その壁に刻まれた言葉が、わたしの心に去来します。

「誰に対しても、悪意を抱かず、慈悲の心で向き合う」。

「永続する平和を、われわれすべてのあいだに打ち立て、大切に守る任務を、やりとげる」。エイブラハム・リンカーン大統領の、言葉です。

わたしは日本国民を代表し、米国が、世界が、日本に示してくれた寛容に、改めて、ここに、心からの感謝を申し上げます。

あの「パールハーバー」から75年。歴史に残る激しい戦争を戦った日本と米国は、歴史にまれな、深く、強く結ばれた同盟国となりました。

それは、いままでにもまして、世界を覆う幾多の困難に、ともに立ち向かう同盟です。明日を拓く、「希望の同盟」です。

わたしたちを結びつけたものは、寛容の心がもたらした、the power of reconciliation、「和解の力」です。

わたしが、ここパールハーバーで、オバマ大統領とともに、世界の人々に対して訴えたいもの。それは、この、和解の力です。

戦争の惨禍は、いまだに世界から消えない。憎悪が憎悪を招く連鎖は、なくなろうとしない。

寛容の心、和解の力を、世界はいま、いまこそ、必要としています。

憎悪を消し去り、共通の価値のもと、友情と、信頼を育てた日米は、いま、いまこそ、寛容の大切さと、和解の力を、世界に向かって訴え続けていく、任務を帯びています。

日本と米国の同盟は、だからこそ「希望の同盟」なのです。

わたしたちを見守ってくれている入り江は、どこまでも静かです。

パールハーバー。

真珠の輝きに満ちた、この美しい入り江こそ、寛容と、そして和解の象徴である。

わたしたち日本人の子どもたち、そしてオバマ大統領、皆さんアメリカ人の子どもたちが、またその子どもたち、孫たちが、そして世界中の人々が、パールハーバーを和解の象徴として記憶し続けてくれる事をわたしは願います。

そのための努力を、わたしたちはこれからも、惜しみなく続けていく。オバマ大統領とともに、ここに、固く、誓います。

ありがとうございました。